

『浜松中納言物語』における感情のゆらぎについて (下)

著者	大原 理恵
雑誌名	東北大学附属図書館研究年報
号	33
ページ	1-6
発行年	2000-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133268

『浜松中納言物語』における感情のゆらぎについて（下）

大 原 理 恵

三

君はひとへにうちをこなひ給てこよひ夢にもろこしの後の見え給へりければ片つ方の心にはおぼしやりつゝをこなひ暮し給けるにかゝる事などうちきゝつけ給へる心ち夢か何ぞと胸つぶれてこの御消息をあけて見給にあはれにかなしともよのつねなりかばかりおぼしすてはてにたる世の思この御消息見給になをさめがたげにおぼされて（中略）などおぼしつゝくるも前の世までいみじうらめしき御契りなり（二六九頁）

引用は、吉野尼君が河陽県後の消息を受け取るところである。『浜松』では夢の内容が明らかに語られ、そしてそれがやがて実現する事を予告的に示す場合も多い。この場合も、尼君が見た後の夢は、後の消息がもたらされるということを尼君に知らせる予兆的性格をもっているが、特にここでは、夢からさめたあともなお、名残りにゆらめく心の動きをたどってみることにしたい。

尼君の、いかにも尼らしく「ひとへにうちをこなひ給」ありさまが、夢によって「片つ方の心にはおぼしやりつゝをこなひ暮し給けるに」に変わり、中納言の来訪によって「夢か何ぞと胸つぶれ」る思いをする。巻三冒頭より、吉野山を訪れた中納言の側から風景などの具体的な描写を中心として綴られてきたが、ここで尼君の側に

物語が移された後は、会話や動作などを描かない抽象的な書き方がつづき、それがより夢幻性を高めているように思われる。そして、この夢からさめやらぬ心地はさらに揺曳し続ける。

うつゝにはあらぬことゝぞとまち見つる夢まぼろしかかげろふかこは

うつゝとも夢ともえこそ名のられねたづぬるほどのこの世ならねば

(二七一頁)

大切な人物の訪れを告げる予兆的な夢は『源氏物語』蓬生巻などに見られるものである。このような夢の扱いは物語の一つの型と見なされるものの、さらに普遍的な通念が根底にあることもまた認められよう。

こゝにはいとどながめまさる頃にてつくゝとおはしけるに昼寝の夢に故宮の見え給ひければさめていと名残かなしく思してもり濡れたる廂の端つかたおし拭はせてこゝかしこ御座ひきつくるはせなどしつゝ例ならず世づき給ひて

(源氏物語 蓬生 二一五二頁)

源氏は昔を懐かしむ心持ちがつつたそのとき、藤の花の匂いに誘われて末摘花を尋ねようとする。末摘花の方も父宮の夢を見て物思いをするところであった。再会の場面を単なる偶然に終わらせず、両者の通いあう心に運命的な重みをつけ加えている。『浜松』では『源氏物語』以上に、それが現実を超越した者の(具体的には「仏」)の意向の現れであるということ、むしろあからさまにするように書きなされている。また、尼君と中納言は直接の関係を持たない、したがって常識的には心の通いあいがあるはずもない人物であることも注目に値するであろう。

ところで、中納言の尼君来訪は、再度別な角度から描かれている。

この三年ばかりはまづこの御いのりをのみ先に立てゝ念じ給ふ夢にいとたうとげなる僧の来て(中略)といふ人見やればいふかぎりなく清らなるおとこのあるをわれを助けんとて仏の変じたまへる人にこそあんなれ

と思ひておがむと見給しにこの中納言たづねおはして風のつてにもきこゆべきやうもなき後の御ありさまをくはしくきゝ御消息をも見おはせしよりその御勢ひ出で来てこちたきまでよるひると人目しげうあさましく荒れこぼれたりしも作りまたも建てそへ秋の田の実をつむべき御蔵を建て御庄／＼のもののどももてまいりつゝさはがしきまであるに

（二八三・四頁）

中納言が尼君を尋ねる必然性が、尼君の半生をたどり直す文脈の上に説明されているところである。『源氏物語』において姫君たちをつらい立場に陥れる生活の苦しさは、尼君一人に関するかぎりはさして問題になるものではない。尼君を追いつめて行くのは心の乱れに集中されており、そのためか、傍役的人物ながら、中納言以外では心の尋常ならぬゆらぎが多く描写されている。

ところで、この部分では前の場合とは異なり、夢自体の描写は比較的長く詳細であるが、中納言の出現以降、すなわち夢と現実が入れ替わってからは、反復になるためでもあるが、状況の急変するさまが速い調子で書き進められており、そうした運びではいくらか共通するものがある。ただし、もはや夢の名残は長引くことはなく、仏の方便あはれにわがのちの世のうたがひなく涼しくおぼしやられ給つゝ

（二八四頁）

との、悟り澄ました心境に落ち着いて尼君の半生の回顧は終わり、つきには吉野姫君が導き出されてくるのである。

尼君の見た夢は、未知の人である中納言の来訪を受け入れる上で不可欠のものであったと考えられるが、次に掲げる大君の夢にはそうした積極的役割は認めにくい。

大将殿姫君いみじく物思へるさまにながめおぼし入りたるかたはらに寄りて我も心にはなるゝよなき悲しさをいふとおぼすにうちなきて

誰により涙の海に身を沈めしほるゝあまとなりぬとか知る

との給をいみじうあはれにわれとほろ／＼と泣くと思ふに涙におぼゝれてうちおどろきぬるなごり身に添へる心地してかう遙かに思ひやるとならばおほよとにてもあらず思ひやりなうけ近う見なして程なくはるかになりにしをいかにおぼすらんと思ひやる涙は現にもせきやる方なくて

日の本のみの浜松こよひこそ我を恋ふらし夢に見えつれ

（一六七・八頁）

この夢は、散逸部分に描かれていた大君の出家を、中納言に告知する役割を一応はもっているといえる。もっとも、中納言は姫君がそのようなとりかえしのつかないことになっていようとは、文字通り夢にも思っていないかった。彼はその真の意味を理解できず、後に人の口から真相を告げられてはじめて思い合わせることとなる。この夢は少なくとも現態では、物語の展開上予告的な働きがなく、伏線ともならない。しかし、中納言は、姫君の「いみしく物思へる」心を感じとり（これは真実であった）、中納言自身悲しさに夢でも、そして現実にも涙を流す。この夢告からは、事実を通知するという役割はそぎ落とされ、ただ悲しみだけが伝えられる。そして、夢は誤解されながらも悲しみばかりはたしかに受けとめられ、中納言の心をただならずゆさぶるのである。『無名草子』を引用するまでもなく、大君出家は散逸部分でも重要な場面であったはずであり、それに対応するのがこの夢である。大君の側にあつて悲しむことのできない、それどころか何も知らされない中納言は、何とはわからないままに悲しみだけを共にする。知ることのできない中納言に可能なのは、ただ夢の名残を抱きつつ、遠く故国に思いをはせることばかりである。

この中納言の感情の高まりは、「年もはかなく暮れぬ」と打ち切られる。それは、大君を中心とする物語を一段落させ、河陽皇后に中心を移す区切りであったとも解釈できる。というのは、これより後は、大君を思う心は

望郷の念にとけこんで区別がつきがたくなり、一方、后に対する思慕はつづけるからである。

去年のこの頃の人々の御気色ども思ひ出づるにあはれに恋しきなくさめに

（二六八頁）

住み馴れし夜の空もかうぞあらんかしと今宵の月をみつゝおもひ出で給人もあらん

（二七六頁）

再び姫君が現れるのは、河陽皇后と契りをむすぶ場面になる。

大将殿の姫君の御事ふと思ひ出でられてこひしかりけり

（二八〇頁）

ここには、姫君に対する裏切りになるというような倫理的性質は希薄で、後の涙から姫君にものを思わせるようになった時のことを思い出し、恋しい心をかき立てられている。『狭衣物語』の狭衣が女二宮に逢う場面でも源氏宮を思つてたちまち後悔するところと比較すると、その質的相違がより明確になるであろう。

ところで、この物語には多くの夢が描かれているが、夢そのものではなくとも、夢に近い感情の漂いが見られるところがある。

中納言は宮におはしましけるをおぼつかなさと思ひ侘住なれ給し色のはらをだにこそかたみにと思し渡り給へるに九月ばかりのゆふべ前栽の枯れくになりゆき空のけしきもあはれに心ぼそげなるにすゝきののをのれひとり風になびきてうちまねきたるも心ときめきせられて

たづぬべき方しなれば古郷の尾花が袖にまかせてぞみる

うちに入ても見たてまつり給しかばいみじうにほひやかにうつくしげにてる給へりしを見ならひてさびしう見めぐらかされてこひしさいとよまさるに

（四一二頁）

この場面は、式部卿宮が中納言に吉野姫君のことをうちあける決心をし、中納言を尋ねる宮の使いが、仰せを承るところと、中納言を尋ねあてるところの間に、挿入されている。仮に、この部分が全く欠けていたとしても、

物語の展開上は一向差し障りはない。招くすすきに心が動くのは、和歌の上の常套的表現であるが、夢告に相当する予告的部分と見なされ、枯れ行く秋の夕暮れのけはいが、中納言が真相を知るにあたって、ことさらに緊張を回避するかのよう、しめやかな空気でみだしている。これは、拡散的心情・夢幻的情緒が物語の収束に向かって働いている場合であり、前に示した『源氏物語』蓬生巻の予兆的場面の系統をひくものと考えることができ

る。

中納言は目覚めながらも夢の名残の消えやらぬ心地にも似た状態で、使いを迎え「うちかたぶきつゝ」「あやしなから」宮のもとに参上し、その告白を聞き「うちきゝつけたるもうつゝとはおぼえぬに」という思いをする。中納言は、夢を見るような心地にまよいつつやがて現実而降りてくる。中納言は、客観的条件から言えば正しい推測をすることも可能なはずであったのに、心はあらぬ方へ向かいこれを修正しないまま、現実との乖離を拡大した状態で宮と対面する。そうして、しばらく夢心地にさまよう心をおさめて、ようやく現実的思考をめぐらすようになる。

こうした物語の運びは、中納言が女王君の告白を聞くところなどにも見られるが、ともに、夢を見るような心地と、強い決断を導き出すやや長い思考が組み合わされている。こうした、夢幻的情緒と取り合わされる思考については、さらに稿を改め論じることにはしたい。

（了）